

市政

2006
Vol.55

12

ISSN 0488-6801
通巻六五三号
平成十八年二月一日（毎月一回一日発行）
昭和二十七年十一月八日 第三種郵便物認可





黒潮洗う田辺の海の豊穡さは山の豊穡さ健全さと連関している

平成十七年五月一日に一市四町村が合併し誕生した和歌山県田辺市は、地域が約七・五倍となり、和歌山県内はもちろん近畿地方でも最大の市域を持つ都市になった。海から源流域に至るまでの広大な市域には国立公園や国定公園だけではなく、世界文化遺産たる熊野古道や熊野本宮大社なども含まれる。新生・田辺市ではこうした豊富で質の高い観光資源を生かすべく、新市創造のためのまちづくり施策の中心に「観光グレードアップ・プロジェクト」を置き、旧五市町村の各観光協会と田辺市観光振興課による「公益を担う官民協働プロジェクト」として、今年春に「田辺市 熊野ツーリズムビューロー」(熊野T.B)を立ち上げた。その活動はまだ緒に就いたばかりで、本格的な展開や具体的な成果はこれから徐々に出てくるわけだが、熊野T.Bの活動は、経済的な意味での地域振興策というだけではなく、旧五市町村が合併した後の「地域の一体化」への試みを無理なく推進するためのモデルケースともなっているのが特徴的だ。かつて「口熊野」といわれ、熊野への入口と位置付けられていた田辺市は今や熊野古道をはじめ、さらに多様な観光資源をも包含するようになった。この合併によるスケールメリットが今後どのような形で生かされていくのかが、大いに注目される。

(本文56ページ参照)



全国に3,000ある熊野神社の総本宮・熊野大社



弁慶生誕地説のある田辺には弁慶関連の史跡が多い
(間鷄神社)



田辺市は紀州備長炭の故郷でもある



田辺市で生涯を終えた南方熊楠の顕彰館



明治の大水害まで熊野本宮大社がここにあったことを記念し
建立された大高原の鳥居は高さ日本一(39メートル)



日本最古の温泉ともいわれる湯の峰温泉

自然と歴史を生かした新地方都市の創造を目指して

世界文化遺産、国立公園、国定公園が同居するまち

合併によるスケールメリットを観光産業に生かす

平成十七年五月一日に一市(旧田辺市)四町村(旧龍神村、旧中辺路町、旧大塔村、旧本宮町)が合併して誕生した新生・田辺市は、人口こそ旧



真砂充敏田辺市長

田辺市時代の約七万人が約八万五千人へと増えるにとどまったものの、市域は約一三六平方キロメートルから約一〇二六平方キロメートルへと、一気に七・五倍強にも増え、和歌山県全体の約二二パーセントを占めるにまで至った(同時に近畿地方で最も広い都市ともなった)。

太平洋に面する田辺湾から和歌山県の最高峰を擁する護摩壇山系(旧龍神村)にまで達する市域は、文字通り源流域から河口までを網羅する変化に富んだ自然相を内包する。

何しろ同一市域の中に吉野熊野国立公園、高野龍神国定公園、田辺南部海岸県立自然公園、大塔日置川県立自然公園が軒を接して同居しているばかりか、海岸地帯から市域を斜めに縦断する形で熊野本宮大社に至る熊野古道(中辺路ルート)とその周辺域は、ご承知のように世界文化遺産にも



設備の整った扇ヶ浜海水浴場は市役所の目の前にある

指定されている。

日本の原風景を感じさせる風光明媚な山・川・海の大自然に加え、その深奥に開かれた日本人の祈りの聖域を目指す無数の先人たちが長い年月をかけて刻み込み慈しんできた道などのすべてが、それぞれ県や国、世界を代表する文化遺産であり自然遺産であると認められているのだ。このような地域は全国的にも珍しいだろう。

「世界文化遺産として登録されたのは、正確には熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社）および吉野・大峰、さらに高野山を加えた紀伊山地三大霊場と、これらを結ぶ熊野古道をはじめとするいくつかの参詣道で、三重県・奈良県・和歌山県の三県（二十九市町村）にまたがる広大なエリアです。その中でも熊野本宮大社につながる田辺市内の中辺路ルートは、これら世界文化遺産に登録された地域全体を見渡しても、代表的な見どころの一つといえるでしょう。

また、世界遺産（自然・文化）にはこれまで世界八百力以上の地域が指定され、登録されてきましたが、《道》そのものが対象となったのは、中世に成立したキリスト教の巡礼道である《サン



熊野古道・大日越入口

ティアゴの道（スペイン）と、紀伊山地の参詣道だけです。とりわけ熊野古道は、歴史的・文化的遺産であるだけでなく、周辺の大自然を含めた総合的な空間が登録理由になっているという意味では、唯一無二の世界遺産といえるでしょう。

その地域のひざ元に暮らすわれわれにとっても、未来永劫、後世にきちんと伝え続けていかなければならない非常に大切かつ貴重な財産です」
そう語るのは真砂充敏田辺市長である。

田辺市では現在、合併後の新しいまちづくりを多角的に推進しているが、熊野古道を含めた豊富な文化遺産・自然遺産を活用する観光振興は、前述のように、合併した各地域のほとんどが世界遺産、国立公園、国定公園に含まれる田辺市にとっては重要な地域経済振興の手段でもある。

同時に新生・田辺市の官民がこぞってホスピタリティを発揮しなければかなわぬ観光振興は、地域全体が心を一つにして取り組まなければならない事業であるだけに、新市スタート後の各地域の一体化を無理なく図る事業としても、非常に重要な位置付けを持っているといえるだろう。

「市町村合併によって市域が拡大することには、

行政的にみればメリットもデメリットも確かにあります。しかし、合併によって市域が大幅に拡大することのスケールメリットを最も生かす手段の一つが、田辺市のような市域のほとんどにその豊富で良質な観光資源が内在する都市にとつては「観光振興」だと考えます。

例えば、熊野古道に関していえば、かつて「熊野」と称され、熊野本宮大社への入口として栄えた旧田辺地域と、旧中辺路町を貫く熊野古道の代表的なルートでもあった中辺路ルートが、行政区画的にも連続した一つの地域になったメリットには非常に大きなものがあります。こうしたスケールメリットを生かした観光振興を図るべく、田辺市では新市創造プロジェクトの柱として現在、『観光グレードアップ・プロジェクト』を多角的に推進しております」（真砂市長）

田辺市の観光振興を担う熊野TBの存在と役割

合併によって生じた田辺市の観光振興におけるスケールメリットを最大限に活用するために策定

された「観光グレードアップ・プロジェクト」を、さらに原動力とするべく本年四月に設立されたのが、旧一市四町村の各観光協会が加盟する「田辺市 熊野ツーリズムビューロー」（以下、熊野TB）だ。熊野TBの財源は各観光協会からの拠出金と田辺市からの助成金で構成され、事務局には田辺市観光振興課から出向の事務局長および主任に加え、カナダ人の国際観光推進員、新規採用の一般事務職員などが常駐する。

熊野TB・浦野事務局長は熊野TBの主な役割について、「田辺市の観光振興におけるプロデューサー的役割を果たすこと」と同時に、田辺市から事業委託を受けての「田辺（歓交）戦略推進事業の実施にも当たること」と語った。「歓交」とは聞きなれない言葉だが、「交流」をみんなで「歓ぶ」まちづくり」の意味の造語だといふ。

「合併前から市内各地区にあった五つの観光協会は、合併後もそれぞれの地域性や独自性を保ちながら、それぞれの地域に密着した活動を従来どおりに行っています。同時にそれら五つの観光協会が加盟する熊野TBでは新市全体を視野に入れた広域的な観光振興事業を積極的に推進し、観光客

のさらなる誘致に直接的につながるような官民協働事業の先駆けとしての役割も果たしてもらいます。合併によって生じたスケールメリットをより効果的に生かすべく官民協働で知恵を絞り合うための場、それが熊野T Bなのです」(真砂市長)

熊野T Bと旧来から各地区にある観光協会との関係は、合併に伴う旧田辺市および旧町村地区(現・行政局)の一体化事業に関する、真砂市長の次のような考え方も非常によく似ていると思われる。

「昨年合併したばかりの田辺市では、各地区の一体化を急がず、むしろ各地区の独自性を尊重しながら、それを超越した各種合同事業などを通じて徐々に一体化を図る計画であります。人口約七万人の県内第二の都市と、わずか数千人ではありませんが広大で複雑な地形の山間地域に古くから開けていた、歴史も誇りもある町や村が一緒になったのです。行政の組織上においても急激に一体化させることは困難ですし、その必要もありません。

むしろ各自の個性の上に成り立つ新たな関係をみんなで話し合いつつ模索していこうというのが、新生・田辺市長に就任するに当たった私の

主張でもありませんし、将来都市像である「自然と歴史を生かした新地方都市」も、その模索の延長線上にこそ実現するものと考えます」(真砂市長)

真砂市長はさらに「それだけではありません」と続ける。

「近畿で最も広い都市となった田辺市には世界文化遺産に登録された熊野本宮大社や熊野古道だけではなく、日本三美人の湯で知られる龍神温泉、国民保養温泉地であり日本最古の温泉ともいわれる湯の峰温泉や川湯温泉、渡瀬温泉を合わせた熊野本宮温泉郷などのほか、市域全体が山・川・海の大自然に包まれています。食の面でも紀州の梅・みかんや豊富な魚介類など、田辺市は世界に誇りうる観光資源に事欠きません。

これら豊富な観光資源を内包する地域情報を国内外に向けて発信するためには、民間業者で構成される各地区の観光協会がこれまで独自に培ってきた民間団体としての生き残りの知恵、情報収集能力が大きな武器となります。熊野T Bの事務局に市の観光振興課職員を出向させ、官民協働で新生・田辺市の情報を世界に向け発信していこうとする試みは、観光をはじめとする経済的発展のみ



多くの源流域を持つ田辺市は水資源が豊富（写真は右会津川）

ならず、協働のまちづくりが基本となる田辺市政のこれからの在り方を探るための重要な試金石の一つになるものと期待しております」

ここで思い出されるのが、前述した熊野TB・浦野事務局長の談話にあった「田辺「歓交」戦略推進事業」という言葉だ。交流をみんなで歡ぶまちづくり。これは、自らの持つ豊富な観光資源を官民の知恵を結集してより付加価値の高いものとし、世界を視野に入れた「本物の観光地づくり」を目指す熊野TBの活動への意気込みそのものが、行政と民間（そして市民）による意識の共有および協働で成り立つ新生・田辺市のこれからのまちづくりにも確実につながっているということが、如実に意識された言葉といえるだろう。

とはいえ熊野TBは本年四月に設立されたばかり。その活動も緒に就いたばかりだ。本年度は日本語を含めた四力国語対応のホームページの作成、交通媒体等を活用した都市部観光宣伝事業などのほか、通訳サービスや外国人来訪者のサポート、報道陣を招待してのプレスツアー、フィルムコミッションの推進・支援事業、各行政局および観光協会同士の情報収集・交換・管理体制の構



南方熊楠顕彰館には熊楠が暮らした家も残されている

築、各種営業活動の研究と実践など、今後の多角的な活動のための基礎固めが主になっている。

また、本年七月に策定された『田辺市観光アクションプラン』においても、これからの田辺市観光事業に熊野TBが果たす重大な役割が明文化されており、同アクションプランの巻頭には、次のように書かれている。

「観光の歴史は巡礼に始まる。(中略)熊野の人々は豊かな自然の中で独自の生活文化を育みながら、聖地への来訪者を分け隔てなく受け入れ、みだし、いやしてきた。(中略)「持続可能」「エコロジー」「バリアフリー」「多文化の共存」「いやし」といった二十一世紀の観光のキーワードは熊野が千年以上にわたって実践してきたものである。こうした地域に住むことを誇りに思い、観光の原点であり最先端である熊野の精神を見つめ直そう。(中略)アクションプランの作成自体が一つのアクションであり、「地域をつくる」営みの第一歩として作成されるものである。」

田辺市の将来都市像「自然と歴史を生かした新地方都市の創造」に向けての決意が鬚髯ほらひげとしてくるような、力のかもった宣言ともいえるだろう。



紀州材を使った《アトリエ龍神の家》には各分野のアーティスト9家族が暮らす
（写真はイラストレーター・やのともこ氏）

奥深い神秘を堪能させてくれる田辺の大自然

かくして近畿地方最大の市域を誇る新生・田辺市のエッセンスを感じ取るべく、政策調整課のご協力の下に市内視察をさせていただいたが、出発してすぐ、聞きしに勝る田辺市の広さをあらためて実感することとなった。まずは、田辺市の中でも、海辺に展開する中心市街地からは恐らく最も離れた行政区域の一つである旧龍神村を目指した。これは、田辺市が市外からの移住および定住促進事業の一つとして推進している「アトリエ龍神の家」を視察させていただいたためだが、この旧龍神村への車による道のりが片道だけで優に一時間はかかるのだ。

その分、そこは確かに、深い静寂と癒やしの気に満ちた別天地の趣があった。

「アトリエ龍神の家」は、新生・田辺市が「観光グレードアップ・プロジェクト」や「公益を担う官民協働プロジェクト」などとともに、政策の柱の一つとする「第一次産業を核とした定住促進プロジェクト」の一翼を担う事業でもある。

「アトリエ龍神の家」には現在、和歌山県と田辺



紀州備長炭作りの体験もできる田辺市紀州備長炭記念館

市が「緑の雇用事業」の一環として地元の木材（杉など）で昨年建てた計九棟のアトリ工付きモデル住宅があり、九人のクリエイター（造形作家、照明ディレクター、デザイナー、陶芸家、イラストレーター、チェンソーアーティストなど）とそのご家族が暮らしている。家賃は最初の五年間は無料。その後さらに定住を望む居住者には家賃を払って借りてもらふことになる。

紀州材のPRという意味合いだけではなく、時代の最先端を感じ取るアンテナを持つクリエイターたちが定住してくれることによるさまざまな刺激が、龍神地区にとっても、また田辺市全体にとっても大きなメリットとなるはずだ。

居住者の一人、イラストレーターの「はやのともこ」氏を訪ね、いろいろとお話を伺うことができた。大阪在住だったやのさんは、もともと龍神付近の大自然が大好きで、何度か訪れたことがあり、この「アトリ工龍神の家」の話を知ったときには、即座に応募したという。

「特にイラストを描いたり絵本を作ったりという私の仕事には、目には見えない何かを「感じる」ことがとても重要なので、豊かな自然の中で暮ら

せる今の住まいに來られて、本当に幸せだと思っ
ています。五年たっても、可能な限りここにいた
いですね」(やのともじ氏)

田辺市龍神地区での大自然の神秘と刺激に満ち
た、やのさんご一家の暮らしぶりは、やのさんの
ホームページへの全国からのアクセスによって、
自然に発信されている。これもまた、田辺市にと
っては貴重な情報発信手段の一つといえるだろ
う。

山また山の大自然を堪能した後、本場の紀州備
長炭を作る風景にも出合つことができた。

ウバメガシを硬く焼きしめた備長炭を打ち合わ
せると、涼やかなガラスのような音色を奏するこ
とはよく知られているが、焼かれている最中の備
長炭はまさに神秘の炎に包まれ、見る者をいつま
でも飽きさせない。

そして、取材最終日、田辺市観光の最大のハイ
ライトでもある熊野古道を訪ねるべく早朝のバス
に乗った取材者を待っていたのは、十月初旬に日
本列島を席卷したあの集中豪雨だった。

前日までの市街地や海、旧龍神村などを包み込
んでいた穏やかな秋の天候から一転、熊野の大自

然は豪雨の中にその神秘的な姿を包み隠している
かのようなだった。まさに車軸を流すようなという
表現がびつたりの豪雨のため、巻頭のフォトダイ
ジェストにもあるように、河原に湧出する湯の峰
温泉の「つぼ湯」は激流の中に水没し、熊野古道
は道がそのまま滝のように雨をほとばしらせてい
た。

取材者にとっては最悪の天候であるが、世界文
化遺産に指定されている熊野はやはりいろいろな
意味で奥深い。

雨が一時的にやみかけたときに現れた熊野本宮
大社本殿の神秘的なフォルム、田園地帯の中に忽
然と立つ日本一の大鳥居(大斎原)の荘厳さ、日
本最古の温泉ともされる湯の峰温泉街の古色あふ
れるたたずまい、さらには滝のような雨水に洗わ
れる熊野古道の雰囲気などの一つ一つが、豪雨を
媒介に、取材者に熊野の大自然の奥深さを静かに
「感じ」させてくれているかのようなだった。